

市原市番后台竹部田遺跡

—高滝取水場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1 9 8 2

千葉県水道局

財團法人 千葉県文化財センター

ばん ご だい たけ べ た

市原市番后台竹部田遺跡

—高滝取水場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1 9 8 2

千葉県水道局
財團法人 千葉県文化財センター

序 文

房総半島を南西から北東に連なる清澄山系には、太平洋側、東京湾側に大小の河川が流れております。特に東京湾側には、養老川、小櫃川等南北に長い河川が発達し、河川の両側には数多くの遺跡が残されております。

一方、千葉県における水の需用は、京葉工業地域の人口増加及び臨海工業地帯の発展に伴い、年々増加しております。

このため、千葉県では、養老川総合開発事業の一環として、養老川の治水、生活・工業用水の供給等を目的とした高滝ダムの建設を立案し、それに伴い、高滝取水場の建設を計画しました。

千葉県教育委員会は、高滝取水場建設に伴う埋蔵文化財について事前に実態を把握するとともに、その取扱いについて、事業主体者である千葉県水道局と慎重なる協議を重ねた結果、記録保存の措置を講ずることとし、(財)千葉県文化財センターを調査機関として指定しました。

千葉県教育委員会の指定をうけ、当センターでは昭和57年4月に千葉県水道局と委託契約を結び、発掘調査を実施しました。

発掘調査により、弥生時代の竪穴住居跡等が検出され、昭和54・55年度に当センターが発掘調査を行った番后台遺跡と関連する遺跡であることが判明し、当地域における原始・古代文化の一端を明らかにすことができました。

この度、その調査結果がまとまり、調査報告書の刊行の運びとなりました。刊行するに当たり、本報告書が学術的な資料としてはもとより、文化財の保護、普及のために広く一般の方々に活用されることを望んでやみません。

終りに、千葉県水道局の御協力と千葉県教育庁文化課の御指導・助言にお礼を申し上げるとともに、調査に協力された調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和57年12月1日

財団法人 千葉県文化財センター
理事長 今井 正

凡 例

1. 本書は、千葉県水道局による高滝取水場建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本書に所収される内容は、昭和57年度に調査の対象となった市原市養老に所在する番後台竹部田遺跡（遺跡コード番号 219-016）についての報告である。
3. 発掘調査は、千葉県水道局の依頼をうけ、千葉県教育委員会の要請と指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが実施した。調査は昭和57年4月1日から昭和57年6月9日に実施し、その後整理作業を6月30日まで行った。
4. 調査は、次の組織により実施した。

調査部長 白石竹雄

部長補佐 天野務

班長 古内茂

調査研究員 藤崎芳樹

〃 沢野弘

5. 整理作業及び本書の執筆は、藤崎・沢野が行った。

6. 本書における遺構・遺物は、下記のとおり縮尺を統一してある。

住居跡 平面図・断面図 $\frac{1}{50}$

土壌 平面図・断面図 $\frac{1}{50}$

溝状遺構 平面図 $\frac{1}{50}$ ・ 断面図 $\frac{1}{50}$

遺物 $\frac{1}{4}$

目 次

序 文	
凡 例	
I 発掘調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	1
III 発掘調査の経過と方法	3
IV 検出された遺構と遺物	3
V 小 結	11
Summary	12

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡の位置	2
第 2 図 遺構配置図	折り込み
第 3 図 001号住居跡	5
第 4 図 出土遺物	6
第 5 図 002・003・004号土壤	7
第 6 図 005・006号土壤	9
第 7 図 007・008・009号溝状遺構	折り込み
第 8 図 番後台竹部田遺跡及び番後台遺跡全測図	折り込み

図 版 目 次

図版 1 遺跡遠景	図版 5 006号土壤
遺跡近景	007号溝状遺構
図版 2 トレンチ発掘状況	図版 6 007号溝状遺構
調査区全景	図版 7 008号溝状遺構
図版 3 001号住居跡	009号溝状遺構
001号住居跡遺物出土状況	図版 8 001号住居跡出土遺物
図版 4 002号土壤	
003号土壤	
005号土壤	

I 発掘調査に至る経緯

千葉県では、養老川総合開発事業の一環として、養老川の治水、生活・工業用水の供給等を目的とした高滝ダム建設が立案され、関連施設として、千葉県水道局により高滝取水場建設が計画された。

昭和54・55年度には、高滝ダム建設事業に伴う集団移転地内に所在する番后台遺跡の発掘調査が行われ、縄文時代から古墳時代にわたる遺構・遺物が多数検出されたが、隣接する番后台竹部田遺跡は、番后台遺跡の一部と考えられ、埋蔵文化財の包蔵が予想された。

千葉県教育庁文化課では、番后台竹部田遺跡の取扱いについて、千葉県水道局と協議を重ねた結果、現状保存は困難であるとの結論に達し、記録保存の措置をとることで協議が整い、当センターが発掘調査に当たることになった。

発掘調査は、昭和57年4月1日から4月20日までを準備期間とし、4月21日から6月9日まで実施した。

II 遺跡の位置と環境

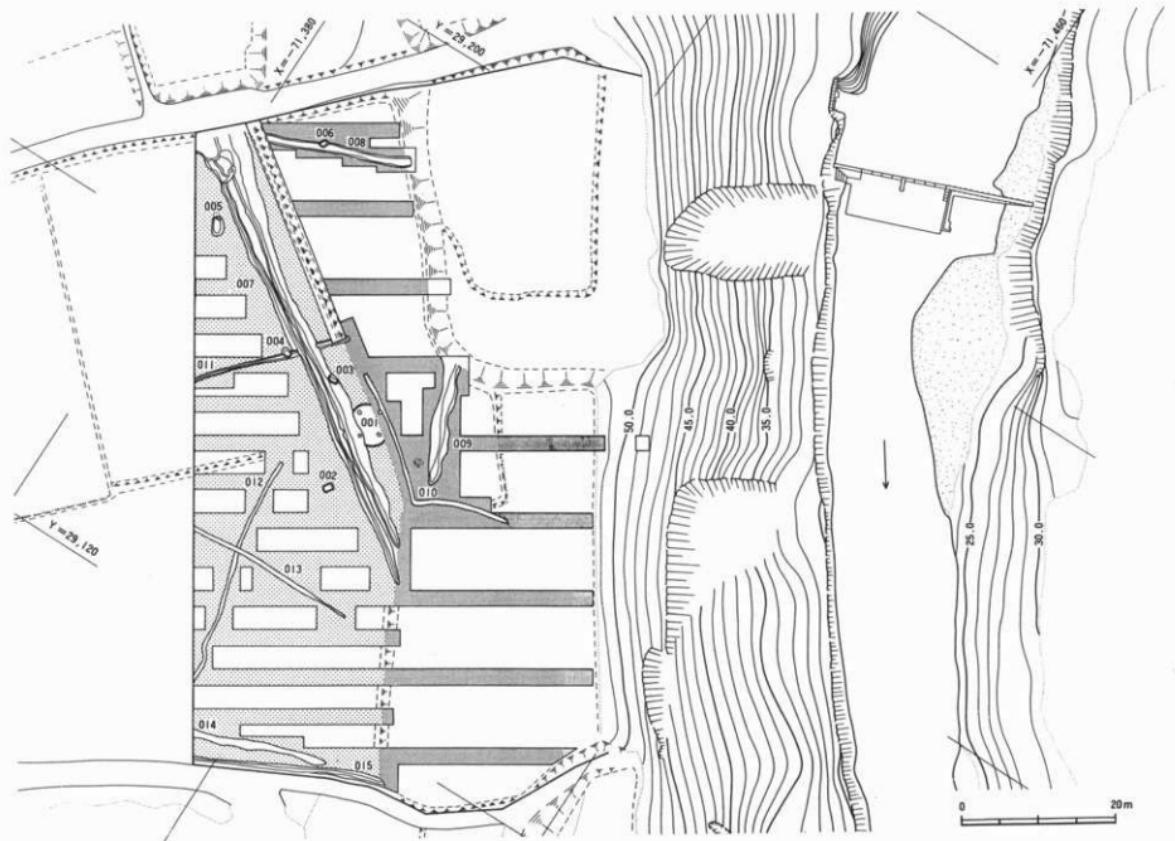
番后台竹部田遺跡は、市原市養老字東ノ方に位置する。昭和54・55年度に発掘調査が行われた番后台遺跡は60m程南西の標高50m程の同じ台地上であり、本遺跡は番后台遺跡の北東端に当たる。現状は水田として利用されているが、以前は、西から東に緩やかに傾斜していたものと考えられる。

遺跡の北東側には、幅15m程の細い谷津が入り込んでおり、南東側は、養老川の蛇行のため急峻となっており、養老川との比高差は約30mを測る。

- | | |
|-------------|-------------|
| 1. 番后台竹部田遺跡 | 10. 永田・不入窓址 |
| 2. 番后台遺跡 | 11. 久保台遺跡 |
| 3. 明金台遺跡 | 12. 久保新畑遺跡 |
| 4. 小谷田中の台遺跡 | 13. 下駒込遺跡 |
| 5. 宮原横穴群 | 14. 外部田ヤツ横穴 |
| 6. 柏野遺跡 | 15. 蔵横穴群 |
| 7. 神明台遺跡 | 16. 岩横穴群 |
| 8. 大和田横穴群 | 17. 蔵遺跡 |
| 9. 久保堰の台遺跡 | 18. 池和田古墳群 |



第1図 遺跡の位置



第2回 遺構配置図

III 発掘調査の経過と方法

番後台竹部田遺跡(5,700m²)の発掘調査は、昭和57年4月1日から4月20日までを準備期間とし、4月21日から6月9日まで実施した。

遺跡は、昭和42年10月までは畠地であったが、農地改良により、階段状に造成された水田として利用されていた。このため、調査は幅2mのトレンチ(ⅠからXVIまで)を設定し、遺構等の遺存状態・所在を検討することにした。

トレンチ発掘の結果、住居跡・土壌・溝状遺構等の落ち込みが確認され、下記の点が明らかとなった。

- (1) 表土層(水田耕作土層・厚さ30~40cm)の直下が砂質ローム層(地山)になっており、黒色土のほとんどは水田造成時に削平されていた。
- (2) 調査区内南東側の半分程は、畦畔を境として、地山が5~30cm程削平されている。
- (3) 調査区内南東側の崖際付近は、本来斜面であったが、盛土により水田として造成されたものである。

上記の3点を留意し、トレンチ発掘により確認された遺構の周辺を拡張し、発掘調査を行った。

整理は、6月10日から6月30日まで行った。

IV 検出された遺構と遺物

001号住居跡

調査区の中央に位置し、北西部分は007号溝状遺構により、また、南東部分は水田造成により、壁及び床面が破壊されている。

遺存している壁及び柱穴から推測すると、長軸約5.5m、短軸約4.4mの規模を有し、形状は隅丸方形を呈する。長軸方向はN58°Wを測る。壁高は、砂質ローム層を10cm程しか掘り込んでいないため、浅く、壁はやや斜めである。床は、砂質ローム層を床面にしており、全体に軟らかい。炉跡は、住居中央より西側に検出された。約33cmの円形を呈するが、007号溝状遺構に破壊され、底面近くに焼土が遺存していたにすぎない。柱穴は、各コーナーを結ぶ対角線上に4個検出された。北側及び東側の柱穴は径約35cm、深さ44~68cmを測るが、南側及び西側の柱穴は深さ17~26cmと浅い。なお、西側の柱穴の周囲は、約1.5×1.0mの範囲が床面より8cm程度低くなっている。柱穴間を結ぶ形状は約3.0×2.8mの方形を呈する。

出土した遺物は、70片程の土器と1点の剝片である。土器は、北壁付近(1・2)と住居中

央(3)に集中して出土したもので、床面から5~10cm程浮いた状態の破片が多い。

北壁付近及び住居中央の土器は、1が柱穴内の覆土と壁際付近の覆土との破片が接合し、更に同一個体の破片が住居中央の3の破片の中に混在して検出されたことから、住居北側から廃棄されたものと推測される。なお、復元された3個体の甕の他は、器面が磨耗した細片で、文様で飾られる土器は検出されなかった。

1は、壁際及び柱穴の覆土中から出土した大部分の破片と住居中央から出土した細片が接合した甕で、全体の $\frac{1}{2}$ 程遺存している。復元口径21.2cm、器高20.7cm、復元底径6.6cm、胴部最大径21.1cmを測る。色調は黄褐色を基調とし、胴下部は褐色を呈する。器面全体の磨耗が著しく、調整等の詳細は不明であるが、複合口縁の口唇部は刻みにより小波状を呈し、胴上部には繩文による押捺痕を有する。

2は、北壁際の覆土中から出土した甕で、全体の $\frac{1}{2}$ 程遺存している。復元口径19.0cm、現存器高18.0cm、胴部最大径16.8cmを測る。色調は黄褐色を呈する。器面全体の磨耗が著しく、調整等の詳細は不明であるが、口唇部は押捺により小波状を呈し、胴上部には繩文による押捺痕を有する。

3は、主に住居中央の覆土中から出土した甕で、全体の $\frac{1}{2}$ 程遺存している。復元口径19.8cm、現存器高15.6cm、胴部最大径19.5cmを測る。色調は黄褐色を呈する。器面全体の磨耗が著しく、調整等の詳細は不明であるが、口唇部は押捺により小波状を呈し、胴上部には繩文による押捺痕を有する。

002号土壤

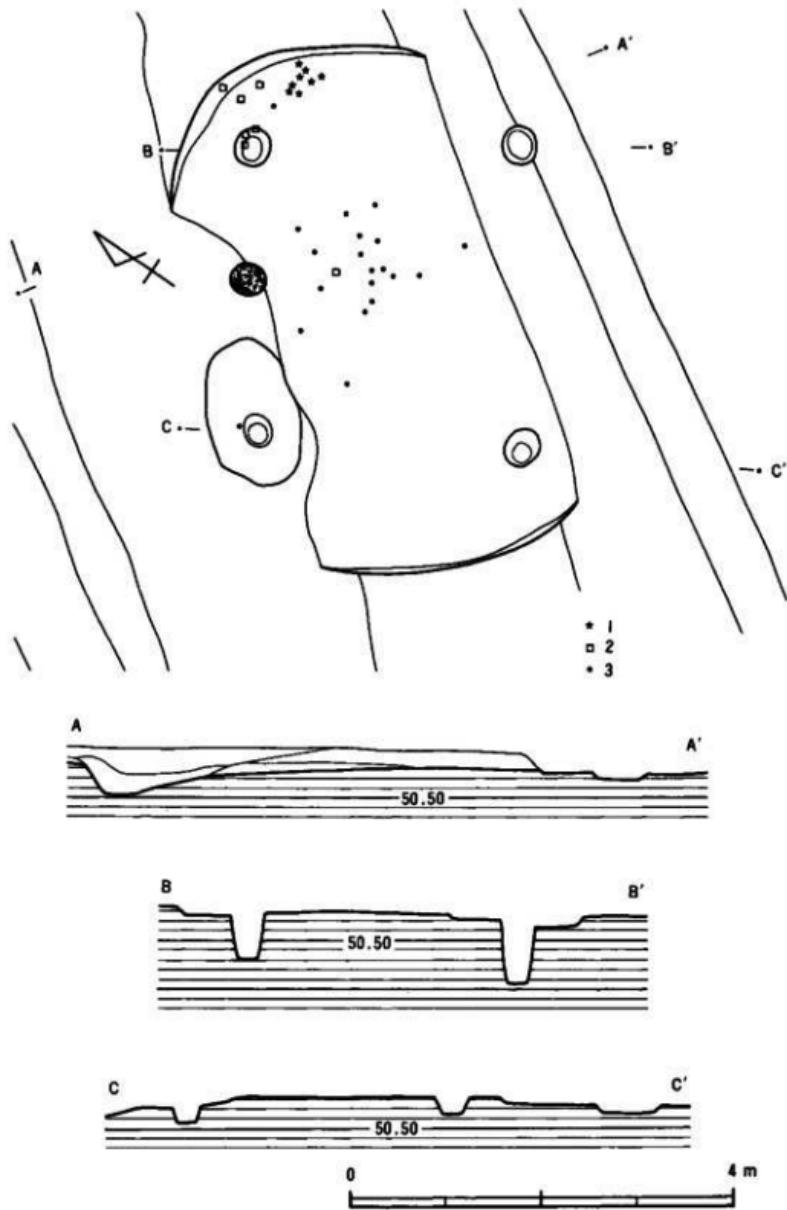
007号溝状造構の2.5m程西側に位置する。平面形は、上端長軸1.4m、上端短軸0.9mの整った長方形を呈する。深さは80cmを測る。底面はほぼ平坦である。壁は急激に立ち上がって直立するが、東側の壁はやや斜めである。覆土は上部・中部が黒褐色土、下部が黄褐色土で砂質ロームブロックを少量含む。

遺物は検出されなかった。

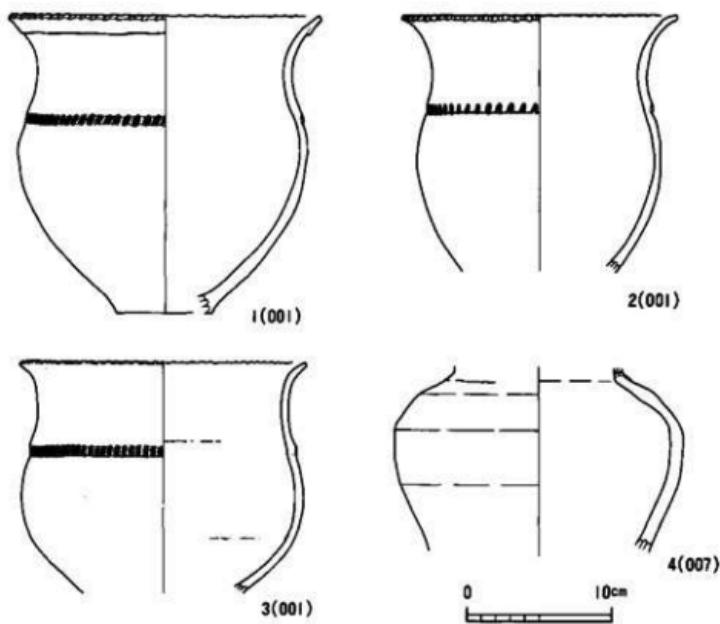
003号土壤

007号溝状造構を精査中に検出されたもので、溝状造構との新旧関係は不明である。平面形は、上端長軸1.3m、上端短軸0.9mのやや不整の長方形を呈する。深さは50~60cmを測る。底面は北側に緩く傾斜しているが、比較的平坦である。壁は急激に立ち上がって直立するが、南東の壁は上半がやや斜めである。覆土は暗褐色土で、底面付近は砂質ロームブロックを含む。

遺物は検出されなかった。



第3図 001号住居跡



第4図 出土遺物

004号土壤

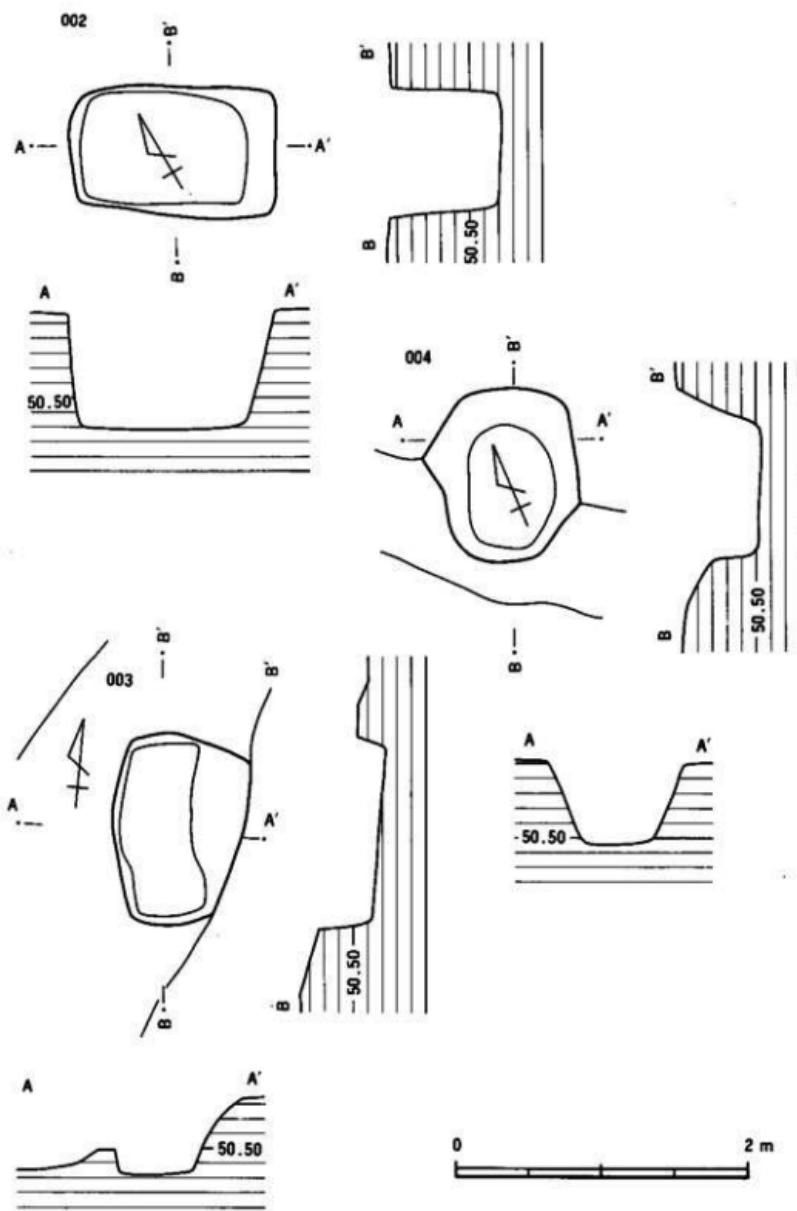
007号溝状造構の30cm北側に位置する。平面形は、上端長軸 1.2m、上端短軸 0.9m の隅丸長方形を呈する。深さは55cmを測る。底面は小さな凹凸があるが、ほぼ平坦である。壁はやや斜めに立ち上がり、上半が外側に開く。覆土は上部が暗褐色土、下部が黄褐色土である。

遺物は検出されなかった。

005号土壤

007号溝状造構の 1.3m 程北側に位置する。平面形は、上端長軸 2.6m、上端短軸 1.6m の橢円形を呈する。深さは60~110cmを測る。底面は西側2/3程は平坦であるが、東側は更に掘り込まれており、やや凹凸が目立つ。北側の壁はやや垂直に近いが、西側及び南側の壁はかなり斜めであり、東側の壁はフラスコ状を呈し、オーバーハングになっている。覆土は、1層が黒褐色土、2層が茶褐色土を斑点状に含む黒褐色土、3層が砂質ローム粒子・ブロックを含む黄褐色土であり、南西方向からの流入と考えられる。

遺物は検出されなかった。



第5図 002・003・004号土壤

006号土壤

008号溝状遺構を精査中に検出されたもので、溝状遺構との新旧関係は不明である。平面形は、上端長軸1.0m、上端短軸0.75mの長方形を呈する。深さは40cmを測る。底面は平坦である。壁はやや斜めである。覆土は暗褐色土で、底面付近は砂質ロームブロックを少量含む。

遺物は検出されなかった。

007号溝状遺構

調査区の中央に検出され、001号住居跡を切っている。北東から南西に直線状に延びている。南西側は、地山が削平されていたため、更に延びるものか否かは不明である。北東側は、谷津に向いている。

本遺構は2条の溝から成っており、全体の幅は2.3~3.3mを測る。2条の溝の間隔は20~120cmを測り、中央部分が狭い。この中間部分は5~45cm程掘り凹められており、小さな凹凸が著しい。

東側の溝は、幅約1.0~2.0m、深さ20~50cmを測る。東側の壁はかなり斜めであるが、西側の壁はやや鋭く立ち上がる。底面はほぼ平坦である。溝底面の深さは南西部より北東部が50cm程低く、谷津に向かう北東端は更に80cm程低い。

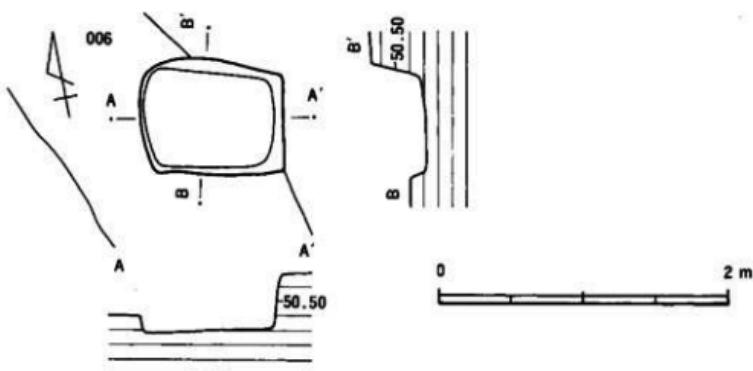
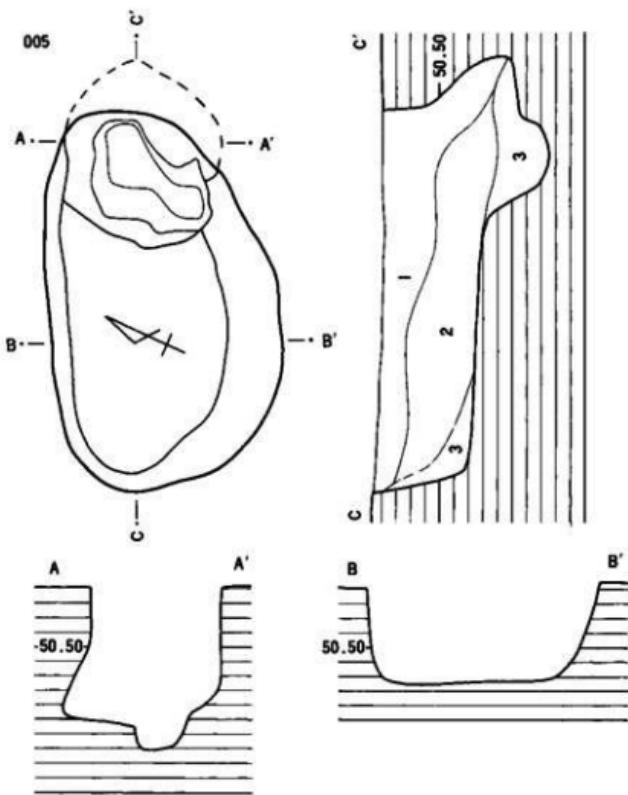
西側の溝は、幅約60~120cm、深さ50cmを測る。壁は両側共に鋭く立ち上がり、垂直に近い。底面はほぼ平坦である。溝底面の深さはほぼ一定であるが、谷津に向かう北東端は1.8m程低い。

出土した遺物は、20片程の土器と60点程の礫で、すべて覆土中から検出された。土器は、図示した須恵器の他は繩文式土器1片、古墳時代前期の高环2片、その他の大半は器面磨耗のため時期不詳の土師器である。礫は、径約5~10cm程で、砂岩、安山岩、チャート、泥岩、礫岩、頁岩、凝灰岩、玄武岩、流紋岩等であり、砂岩、安山岩が多い。

008号溝状遺構

調査区の北東端で検出された。南北に延びているが、北側は赤道のため未調査であり、南側は谷津に向いている。幅約1.0m、深さ約40cmを測る。壁は斜めである。底面はほぼ平坦であるが、北側から南側に傾斜している。覆土は上部が暗褐色土、下部が砂質ロームブロックを含む黄褐色土である。

出土した遺物は、3片の土器と20点程の礫で、すべて覆土中から検出された。土器は、器表裏面が磨耗した細片であるが、土師器と考えられる。礫は、径10cm前後で、砂岩、安山岩、チャート、泥岩、凝灰岩、玄武岩、流紋岩等であり、砂岩が多い。



第6図 005・006号土壤

009号溝状遺構

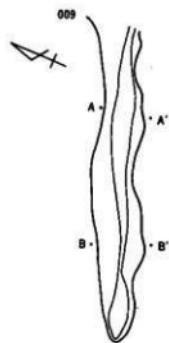
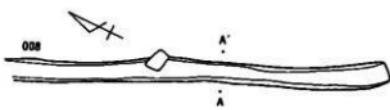
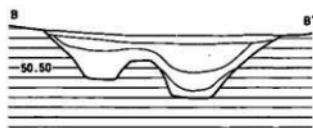
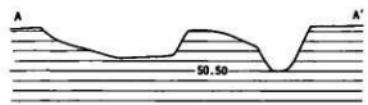
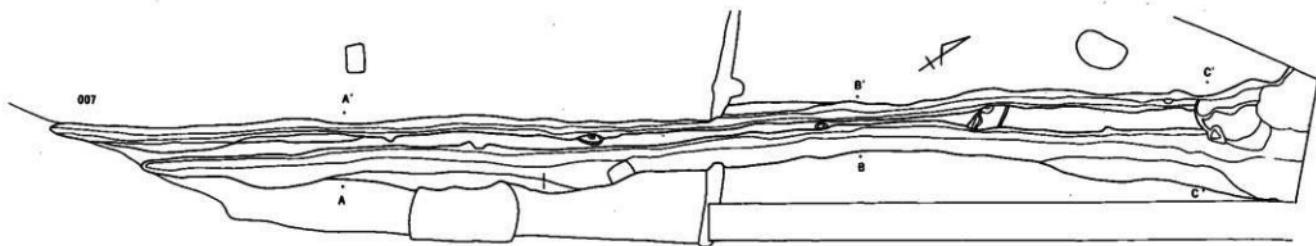
調査区の中央部に検出された。東西に延びているが、東側は谷津に向いている。幅2.0~2.5m、深さ20~40cmを測り、幅は不規則である。壁は全体が斜めであるが、東側程緩い。底面はほぼ平坦であるが、西側から東側に傾斜している。

出土した遺物は、3片の土器と45点程の礫で、すべて覆土中から検出された。土器は、器表面が磨耗した細片で、時代不明である。礫は、東側の覆土上面に集中していたもので、砂岩、チャート、安山岩がほとんどである。

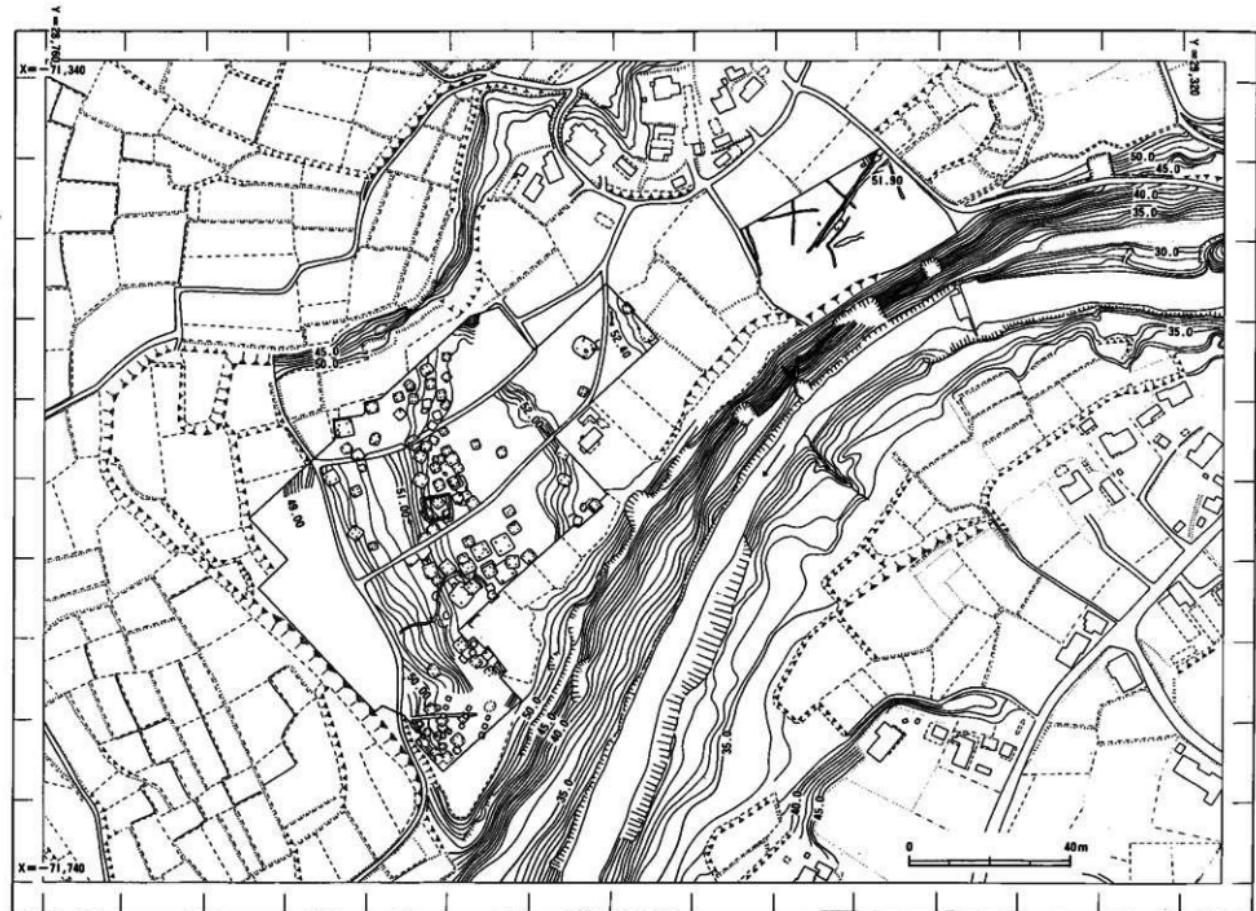
その他の溝状遺構

010号溝状遺構は、調査区のはば中央に検出され、南側は崖面に向いている。幅約40cm、深さ10~20cmを測る。011・012・013・014号溝状遺構は、いずれも北西側が調査区外に延びている。幅50~100cm、深さ5~10cmを測る。015号溝状遺構は、調査区西端に検出され、調査は東側の一部のみである。深さ20cmを測る。これらの溝状遺構の覆土は、いずれもしまりのない暗褐色土である。

これらの遺構から遺物は検出されなかった。



第7図 007・008・009号構造



第8図 番後合竹部田遺跡及び番後台遺跡全測図

V 小 結

番後台竹部田遺跡は、番後台遺跡の南端に当たると考えられる。番後台遺跡は東から西に斜斜する緩斜面上に住居跡、土壙等多くの遺構が検出されている。本遺跡は階段状に造成されていたが、地山面は比較的平坦で、谷津が2か所に認められた。台地全体の形状においては、本遺跡は西から東に緩く傾斜し、2か所の谷津により南側に延びる台地と区切られている。

本遺跡の発掘調査では、住居跡1軒、土壙5基、溝状遺構9条が検出されたが、これらの遺構から出土した遺物は僅少で、時期、性格等の明らかなものは住居跡だけである。

住居跡から出土した土器は、甕が3個体であり、壺・鉢等の他の器種は検出されなかった。土器は、口唇部がいずれも小破状を呈し、胴上部の輪積みによる痕跡の上に縄文原体が押捺施文されるもので、口径が胴部最大径よりわずかに大きいという共通点をもつ。これらは弥生時代後期の甕の特徴を有している。後期の甕には、頸部に輪積み痕が数段施されるものが見られるが、検出されなかった。番後台遺跡からは両者が出土し、時期的関係は明らかではないが、壺・鉢等から久ヶ原・弥生町期と考えられる。

本遺跡で検出された住居跡は、久ヶ原・弥生町期と考えられ、番後台遺跡で検出された30軒の弥生時代の住居跡とはほぼ同時期である。番後台遺跡の弥生時代の住居跡は東から西に傾斜する台地の東端に20軒が占地しており、本遺跡に近い位置に3軒が検出されている。なお、これら3軒の中の2軒は、本遺跡の住居跡とは約50mの距離を隔てており、地山が西から東に傾斜する緩斜面に位置する。

本遺跡を含めた番後台遺跡の集落は、弥生時代においては台地全体に認められるものの、古墳時代に至り、台地の西側に移行するものと考えられる。

Summary

This report is concerned with the archaeological investigation of the Bangodai-Takebeta Site. The site is located at Ichihara City, Chiba Prefecture, Japan, and lies on the fluvial terrace about 50 meters above sea level of the Yōrō River.

The excavation was performed from April to June, 1982 by the Cultural Properties Center of Chiba Prefecture because of the construction projected by the Waterworks Bureau of Chiba Prefecture.

As the result of the excavation, the discovered features are one pit-dwelling (Late Yayoi Period), five pits, one larger ditch, and eight ditches. And the found and restored artifacts are mainly three Yayoi potteries and a Sueki-type pottery.



遺跡遠景（東から）



遺跡近景（南西から）

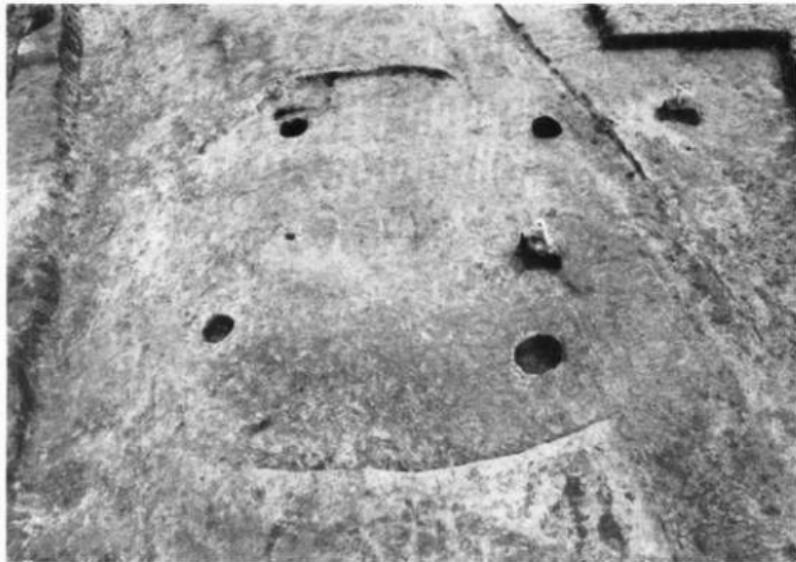
図版 2



トレンチ発掘状況



調査区全景



001号住居跡

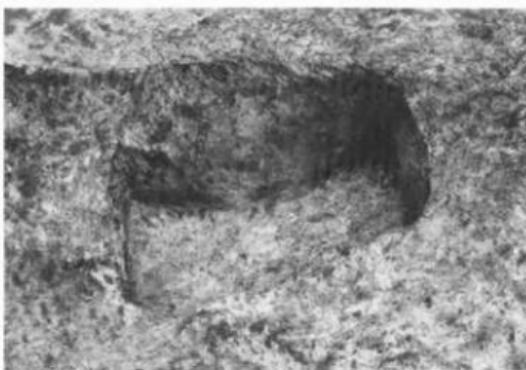


001号住居跡遺物出土状況

圖版 4



002号土壤



003号土壤



005号土壤



006号土壤

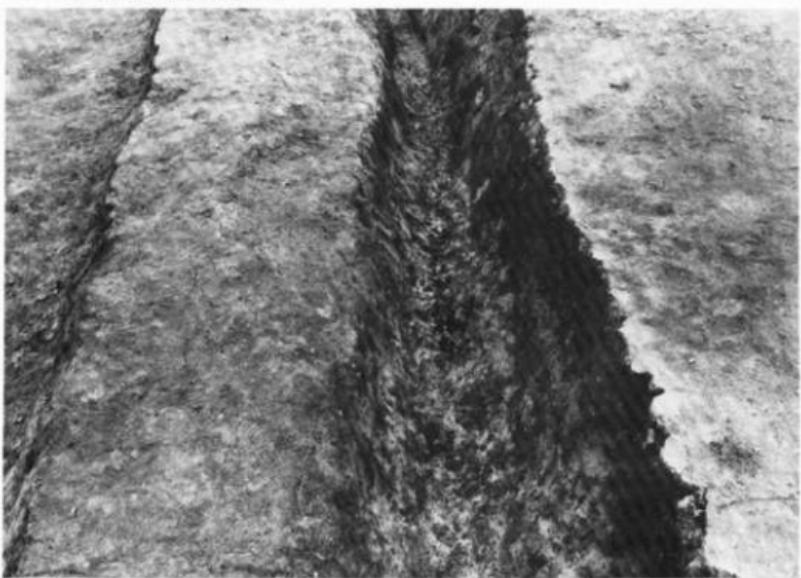


007号溝状遺構

図版 6



007号溝状遺構（北東隅部分）



007号溝状遺構



008号溝状遺構



009号溝状遺構

圖版 8



001号住居跡出土遺物

市原市番后台竹部田遺跡

—高滝取水場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

昭和57年12月20日 印刷

昭和57年12月25日 発行

発 行 千葉県水道局

千葉県千葉市長洲1-9-1

財團法人 千葉県文化財センター

千葉県千葉市亥鼻1-3-13

印 刷 有限会社 正文社

千葉県千葉市都町2-5-5
